特集

# 見世物大博覧会

すごいモノ、珍しいモノ、ハラハラするモノ……。見世物はなぜ、人びとを惹きつけてきたのか。特別展「見世物大博覧会」の開催に合わせ、さまざまな時代・多種多様な形態の見世物の世界を紹介する。

特別展　見世物大博覧会
会期　二〇一六年九月八日（木）から十一月二十九日（火）
会場　国立民族学博物館　特別展示館

## 見世物と人びと

笹原亮二（ささはらりょうじ）　民博 民族文化研究部

### 見世物小屋の賑わい

見世物と聞くと、あまりよくない印象を抱く人が多い。「見世物になる」「見世物にしたくない」といった表現には、いずれも見世物に対する否定的な意味合いがうかがえる。しかし、現在は否定的な印象が先に立ち、相当分が悪い見世物も、以前は必ずしもそうではなかった。

一七世紀初めの京都の四条河原を描いた絵画には、高い柱から張り下ろした綱につかまって芸当をおこなう蜘蛛舞、足で弓矢を操る楊弓（ようきゅう）、珍奇な獣や鳥の見世物などの興行の様子が見られる。時代が下がり、当時の江戸や大坂などの街を描いた絵画にも出し物の絵看板や幟（のぼり）を掲げた見世物小屋が建ち並ぶ盛り場が見られる。社寺の境内の絵画にも、幟を掲げた見世物小屋が建っている光景が描かれている。当時の錦絵には、見世物小屋を背景に洒落た着物の男女を描いたものもあり、流行のスポットとなっていたことがうかがえる。

明治時代に入ると、以前からのそうした見世物小屋に加え、見世物の常設館やさまざまな出し物を一カ所に集めた見世物興行もあらわれた。横浜のような新興地の盛り場でも盛んに見世物の興行がおこなわれるようになり、各地の見世物は大勢の見物人を集めて賑（にぎ）わった。

### 人びとを魅了したカラダとモノ

見世物小屋では多種多様な見世物がおこなわれ、大勢の人びとを魅了した。修練を積んだ演じ手のカラダによる技芸の見世物には、宙に張り渡した綱の上で離れ業を演じたり、足で大小の物品や人間を操ったりする軽業（かるわざ）、独楽を巧みに操る曲芸、水を自由自在に出し入れする奇術などがあった。モノの見世物では、籠目を編んで人物や動物を作り上げる籠細工、貝や珊瑚などの同一素材で奇抜な造形を作る一式細工、巧みな仕掛けで本来動かないモノを動かすからくり細工、生きているような精巧な造りの生人形や色とりどりの菊花をまとった菊人形のほか、ラクダやゾウやインコやオウムなどの珍獣珍禽（ちんきん）の見世物も盛んにおこなわれた。

内容がさまざまな見世物にも共通する特徴が見て取れる。そのひとつは、生身の感覚の回復とでもいえばいいだろうか。人びとは、網渡りで演じ手が突然倒れ込むと、はっと息を飲み、思わず声を漏らす。演じ手が火を噴くと、頬に熱を感じ、燃えた臭いが鼻をつく。菊人形を凝視すると菊の芳香が漂ってくる。いずれの場合も、人びとは感覚が直接強く刺激され、その働きが鋭敏さを増したように感じるのではないだろうか。

もうひとつは、虚実の区分が明確ではなく、それが必ずしも問題とはならないことである。紙の蝶が宙に舞うとき、蝶は実物ではないが紙の蝶は実物であり、まがい物と目くじらを立てる人はいない。陶磁器で作った人物像は、実物の人間ではないが陶磁器の造形物としては実物であり、人間が巧みに表現されていれば、賞賛されてもまがい物と非難されることはない。

### 見世物の効用

こうした見世物の特徴は、日常生活における人びとの快不快や虚実の感覚とはかなり趣が異なる。人びとにとって、快不快や虚実の区別は明確で、不快や虚を否定し、排除して快い真の生活の実現が目指される。しかしそれは、不合理や矛盾に満ちた日常生活の実態を考えれば、明らかに非現実的である。それができて快い真の生活が実現したと思えたとしても、それは幻想どころか、より憂慮すべき事態である。そうした幻想に浸るうちに、快不快や虚実が混交し、不合理や矛盾に満ちた現実に十全に感応し得る、生身の感覚が退行したり喪失したりしたことのあらわれかも知れないからである。

そう考えると、見世物は、いささか逆説めくが、人びとがそれに接することで、快不快や虚実が混交し、不合理や矛盾や葛藤に満ちた日常生活に十全に対応し得る、強靱（きょうじん）な生身の感覚の回復を果たす効用をもつといえそうである。見世物だからこそそうした効用を持ち得ると、見世物をもっと肯定的にとらえてもいいのではないか。

古今珍物集覧 元昌平坂聖堂に於て　明治5・1872年　国立民族学博物館蔵 H0253748

絵看板　軽業・足芸一座　明治22・1889年ごろ
国立民族学博物館蔵 H0213141　5枚組のうちの1枚

浅草奥山に於て興行 当年三才七ヶ月
明治9・1876年
国立民族学博物館蔵 H0230729

# 見世物絵とわたし

川添 裕（かわぞえ ゆう）
横浜国立大学教授

浮世絵のなかに「見世物絵」とよばれるジャンルがある。

それは江戸時代から明治半ばごろまでの見世物興行を描いた浮世絵や絵番付のことで、軽業・足芸（あしげい）曲持（きょくもち）・曲馬などの「曲芸」（図1）、籠細工・貝細工・生人形（いきにんぎょう）などの「細工見世物」（図2）、ゾウ・ラクダ・トラなどの「動物見世物」と、描かれるものはバラエティ豊かである。今回の国立民族学博物館の特別展「見世物大博覧会」では、わたしのコレクションを含め多くの見世物絵が展示されるので、このジャンルを知る絶好の機会となっている。

図1：早竹虎吉の曲芸「筑紫飛梅」（2代国貞画『大坂下り早竹虎吉 西両国広小路に於興行仕候』大判錦絵竪2枚続、安政4・1857年）

## 見世物絵を集める

わたしが見世物絵を集めだしたのは一九八三年のことで、当時は平凡社の雑誌『太陽』の取材記者をしていた。まだ二〇代であった。もともと根っからの芸能好きで、一九七〇年代のアングラ演劇をはじめ、新劇、ダンスから歌舞伎、落語までを楽しんでいたが、次第に江戸時代以来の芸能にひかれるようになり、なかでも見世物にはまることとなった。「日常にないもの」や「あり得ないようなもの」を実際に目の前に出現させ、それが短時日で消え失せてしまう見世物は、芸能の核心と思えたのである。

そして、そんな見世物がもっとも盛んにおこなわれていたのは江戸時代後期であり、そこを自分で研究したくなった。その際、文字資料もむろん大事だが、何といっても「見る」ことによって成り立つ見世物では、見世物絵という絵画資料こそが興行の様子を知る手がかり。自分でそれを目の前に置いて親しく接し、研究すべきだとの「天啓」が下り、見世物絵の収集と研究を始めたのである。本業では程なくして書籍の編集部に移り、そこの同僚たちが「イメージを読む」「絵を読む」という方法論に着目していたことも大きな刺激となった。

図2：亀井斎の籠細工・酒呑童子（初代国貞画『江戸の花　籠細工』大判錦絵3枚続、文政2・1819年）

見世物絵（図4）などをお世話いただいた。

これまで、たばこと塩の博物館で開催の特別展「大見世物」（二〇〇三）にコレクションのうち百点弱を出品して公開し、今回の民博での展示でも数十点を出品しているが、数百点ある全体は残念ながら公開できないでいる。何とか死ぬまでには実現したい、と思っている。

図4：江戸の両国で見世物として興行された出雲神事舞（国兼画『出雲国神事舞畧説　神事舞之内折敷舞』大判錦絵、文政8・1825年）



※本エッセイ中の浮世絵4点は川添コレクションより。

図3：日本全国を廻ったラクダの見世物（国安画『駱駝之図』大判錦絵2枚続、文政7・1824年）

# 生人形——市井の人びとの写実造形

福原 敏男（ふくはら としお）
武蔵大学教授

## 精巧な生人形

マネキンのような等身大の生人形は、一九世紀半ばより見世物興行で人気を博した。木製人形表面の木地に胡粉（ごふん）を塗って人肌のつややかな質感を出し、生人形師松本喜三郎（まつもときさぶろう）作品のなかには性器まで作り込まれた精巧なものもあり、リアリズムとエロティシズムで魅了した。川添裕氏によると、生人形興行の全般的主題は非現実的趣向とされ、喜三郎のデビュー作「鎮西八郎嶋廻り」（源為朝（みなもとのためとも）の異界における空想冒険物語）などが代表作とされる。しかし、生人形の現存作例はほとんどない

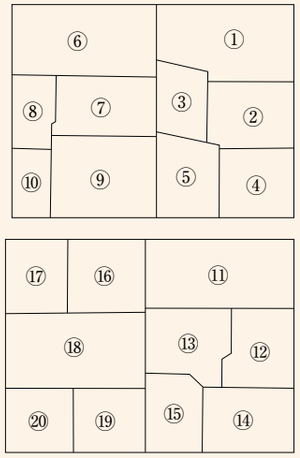
## 喜三郎の新境地

喜三郎の第二弾が好色な趣向と取締まりを受けた結果、彼は安政四年（一八五七）大坂での第三作として、巷（ちまた）の人びとの日常生活を象（かたど）った新境地を開拓した。大木透氏によると、「あって四十八癖」を表現した「浮世見立四十八曲」は、大坂や江戸の人びとを子細に観察して描いた下絵を元に造形化さ

れた、という。喜三郎は万延元年（一八六〇）浅草寺開帳で興行し、斎藤月岑は「喜怒哀楽の情態をうつし、さながら生ける人に向ふがごとし」と記し、浮世絵「当世見立生人形四十八曲」（歌川芳艶画、さいたま市蔵）が興行全体を総覧する。右上から全二〇場面四八体を見ていこう。①乳母がいじわるして、赤子に見知らぬ老人を見せて泣かせ、老人はあわてて赤子をあやし、下女がポカンとした間抜け面、②くしゃみする女と脈を取る医者、③大掃除の最中眼に入った埃を取る、④風呂釜に火を吹く女と熱湯を我慢する男、⑤中年女が縁側で癇癪を起こし、あきれている若い女、⑥糠で肌を手入する人気遊女の黛、楊枝を使う遊女、入歯を取った遣り手婆、⑦遊廓座敷にて旦那、遣り手、太鼓持の睨めっこ（顔拳）、⑧ぬっと出た夜鷹（売春婦）に肝を潰して酒徳利を落とす男、⑨三人三様上戸、⑩草履に付いた汚物を嗅ぐ女、⑪長読経で足がしびれて立てない僧侶、隠れ笑いの女、縁側で待遠しい男、⑫耳をかく女、帳場での思案顔、⑬義太夫、三味線を伴奏する女、それを聞く盲人、⑭折檻癖の内儀が振り上げた長煙管の下でちぢみあがる丁稚、⑮夜道での生酔い侍と臆病な供連、⑯千ケ寺廻り巡礼でくたびれ顔の男女、⑰髪結いが客の元結いのため、毛先を口で引き、客の眼尻が吊り上る、⑱鳥追い女が唄を歌い、男が踊り、罪人を連行する侍が見入る、⑲召使い女を連れて出かけた御殿女中が遠眼鏡を覗く、⑳田圃での情事、のろけている男を騙そうとする女。

作品には武士に対する風刺も効き、滑稽な諧謔味の溢れる姿、面白い表情や動きを追い求め、誇張もあろうが細部にこだわっている。

万延元年（1860）、浅草奥山で興行された生人形、浮世絵「当世見立生人形四十八曲」（4枚続、本来横一列に並ぶ）さいたま市蔵




## 名も無き人びとの日常の様子を象る

ライバル安本亀八は同万延元年、喜三郎を真似て、熊本本妙寺の加藤清正二五〇回忌において四十七癖生人形を興行した。しかし、大木氏によると、喜三郎独得の人肌を表す煉りと胡粉の顔料作りの秘法の方が、亀八よりも一日の長があったという。

従来、生人形とは伝奇伝説や歴史的事件の場面を仕組んだ興行とされるが、さまざまな身分、職業の、生身の老若男女の日常生活を象った興行に注目するのも一興であろう。



# 人間ポンプ・こぼればなし

鵜飼 正樹
京都文教大学教授

## 人間ポンプとその追随者

「人間ポンプ」。この名を名乗り、碁石や金魚や硬貨を飲み込んで吐き分ける不思議な芸を演じる芸人が、少なくとも三人いた。

昭和一五年から一六年にかけて芸能界を席捲した、元祖人間ポンプ・有光伸男（一九一七―二〇〇五）。テレビのビックリ人間番組やドラマで活躍した園部志郎（一九二三―一九九五）。そして、見世物小屋の舞台で演じ続けた安田里美（一九二三―一九九五）。

人間ポンプを名乗らずとも、同様の芸を演じた芸人は少なくない。「人間クジラ」「胃袋魔人」「人間ゴジラ」などなど。芸もネーミングもインパクトが強いせいか、演じた芸人の名前は不明なことも多い。

人間ポンプ・有光伸男公演ポスター　長崎県対馬市の映画館での公演で使用　昭和30年代か　個人蔵

## 四万十川支流で水死した「人間タンク」

四年前のことである。インターネットで「人間くじら出現」という文章を見つけた。「土佐おもしろ人間行状記」というシリーズで、読売新聞高知版に連載されていた記事らしい。

記事によれば、昭和二六年ごろ、旧西土佐村（現四万十市西土佐）の公会堂に「人間くじら」が来て、ガラスやクギ、タマゴを飲んで、そのまま吐き出す芸で人を驚かせた。その後、人間くじらは村の浪花節語りの娘と一緒になったが、川で溺れて亡くなったという。

翌年二月、高知県立図書館で高知新聞のデータベースを検索したところ、「〝人間ポンプ〟水死」という記事を発見した。昭和二六年八月三一日の記事である。「二十九日午前十一時半ごろ住所不定芸人「人間ポンプ」こと松本清氏（四二）は幡多郡津大村目黒川端へ魚を獲りにいき水泳中ショックによる心臓麻痺を起して水死した」という、わずか六行のベタ記事だ。

安田興行社　人間ポンプポスター　昭和40年代前半　個人蔵

予定を変更して、すぐに旧西土佐村に向かった。レンタカーを借り、村の中心部から四万十川の支流をさらに奥へ分け入った旧津大村で、あちこち尋ねたすえに、夕暮れどきにたどりついた小さな集落で見かけた、犬を連れたおじいさんが、「村の浪花節語りの娘」の弟だった。しかも、目の前を流れる川が、まさにその事故の現場だという。

ご自宅で奥さんもまじえてうかがった話では、川で溺れた男の名前はたしかに松本清といい、岐阜出身。ただし、人間くじらでも人間ポンプでもなく、「人間タンク」を名乗っていた。

## 人間タンクと人間ポンプを結ぶ糸

人間タンク・松本は、金魚や碁石を飲み込んだ

で吐き出したり、電球を飲み込んで胃のなかを照らし出したりする芸を演じた。サイコロを飲み込んで、リクエストどおりの目を出すこともできた。浪曲の幕間に演じることが多かったが、その見事さに拍手が鳴り止まなかった。普段でも、値段どおりに口から硬貨を出して買いものをしたり、飴を吐き出して子どもをあやしたりしたという。

松本が溺れ死んだのは、酒を飲んで川に入ったためだった。死後はどこかの大きな病院が解剖することになっているという話も聞いたが、連絡のしようもなく、葬式を出したそうだ。松本の遺骨は、だからこの集落の墓地に埋められている。

ひととおり話をうかがい、ぼちぼち帰ろうかと腰を浮かせたとき、奥さんが人間タンクは「おし」だったともらした。

「おし」「松本清」「岐阜出身」。この瞬間、わたしの頭のなかで三つの言葉がつながった。

岐阜県大垣市在住だった安田里美本人から、人間ポンプの基本を教えてもらった、いわば師匠が、三重県を本拠とする見世物の一座にいた「おしの人」で、「松本清」という名前だったという話を聞いていたことを思い出したのだ。

松本清が、どのようにしてこの土地にたどりついたのか、もはや知る手だてはない。しかし、インタビューのために足しげく通った安田里美の自宅から高知の山中まで、二人の芸人を結ぶ一本の糸がたしかに見えた瞬間だった。

人間ポンプ・胃袋魔人公演ポスター
福岡市のストリップ劇場公演で使用
昭和30年代か　個人蔵

※文中、今日では不適切と考えられる表現がありますが、筆者が話を聞いた人物の発言として、時代背景やインタビューの状況、筆者の意図を尊重し、そのまま掲載します。



# ニセモノとミセモノ

川村清志（かわむらきよし）
国立歴史民俗博物館准教授

## ニセモノの意義

二〇一五年の春、国立歴史民俗博物館で開催された「大ニセモノ博覧会」では、古今東西のさまざまなニセモノが展示された。旧家に残されたニセ骨董品から、偽造酒の製法やコピーレコード、学問の根幹を揺るがした捏造事件まで紹介されていた。社会的に何らかの価値を有するものには、さまざまなニセモノが生み出されてきたことに驚かされる。ただこの展示の趣旨のひとつは、ニセモノにも社会的、文化的な意義があったという点である。博物館の複製品は、広い意味でのニセモノだが、オリジナルの代わりに展示に利用することもできる。骨董品や書画なども、なかばニセモノと知りつつ、社会関係を切り結ぶための仕掛けとして、購入されることもあったという。

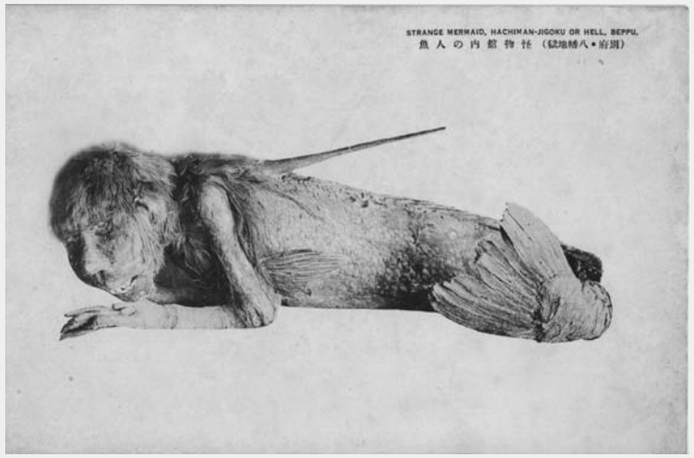


写真2：別府怪物館（現在は閉館）の人魚の絵葉書　個人蔵

## ミセモノという仕掛け

近世以来、都市部で賑わったミセモノは、一見、本物らしさをまとい、見る者を幻惑する。日常的な感覚を撹乱し、常識的な判断を揺り動かす。しかし、ミセモノの多くは、どこかでいかがわしさや猥雑さをまとって表象されている。これらはニセモノであり、虚構であるというメッセージが、舞台や装置のそこここに見え隠れする。「親の因果が子に報い」といった口上や、蛇女、牛女、さらに人魚などは、そういったイメージを体現するものでもある。

写真3：絵看板　謎の人魚　志村静峯作　昭和30年代　個人蔵

むしろミセモノは、ニセモノ的な側面を垣間見せることで、都市という空間の柔軟さ、融通無碍さを獲得しているとも言える。そこで醸成される眼差しは、見世物小屋にあらわれるさまざまな障害者たちにも向けられていただろう。確かに歪で非対称的ではあるが、非日常の片隅で彼らと人びとが邂逅する場として、見世物小屋は存在していた。虚構の皮膜を通すことで、忌避された現実へと人びとを接近させる回路が、ミセモノにあったのではないだろうか。

写真1：国立歴史民俗博物館「大ニセモノ博覧会」の人魚展示風景

## 好奇の眼差し

ちなみに「大ニセモノ博覧会」の目玉のひとつが、人魚のミイラであった（写真1）。これは、サルの上半身と魚（今回は鮭）を継ぎたして、特殊な溶液に浸して作られている。このような人魚は、近世から盛んに制作され、ミセモノともなっていた（写真2）。今回、展示された人魚は、伝統的な製法に則って制作された、本物のニセモノである。

さらにニセ人魚は、遠くヨーロッパにも輸出されていた。それらは彼の地の見世物小屋で紹介され、のちには博物館に保管されることにもなった。当時の博物学者にとって、極東の地、日本は、人魚のような摩訶不思議な生物が生息する場所とみなされていたのである。ミセモノとニセモノに共通するのは、このような未知なる存在への好奇心に他ならない。現代の見世物小屋の絵看板にも、そのような眼差しは受け継がれているのだろう（写真3）。

ミセモノとニセモノへの好奇の眼差しを客体化することで、人は自分たちの生きる世界を見つめ直すことができるのかもしれない。博物館の遠い系譜にもあたるミセモノを再表象する展示は、改めてその文化的な役割を体感する仕掛けとなるはずである。